直接介入してくるのは、家族でもなければ、部落でもない、それは民族である。そこでこの行為は、以後、政治的な意味を帯びてくる。死者たちを合わせることで、いろいろな血縁集団や地縁集団がより高次の統一を形成する。かれらは連帯感を意識して、これによって結ばれ、お互いに助け合おうとする。死者の《社会》をつくることで、生者の《社会》が規則的に再生されていくのである」ロベール・エルツ『右手の優越――宗教的両極性の研究』吉田禎吾他訳、ちくま学芸文庫、二〇〇一年、一一―一一二頁。

日本史小百科 **神道**

伊藤聡・遠藤潤・松尾恒一・森瑞枝 著

四六判三二八頁／本体二五〇〇円

明治政府の宗教政策によって神道は仏教や修験道などと峻別され、神仏習合は神道の非本来的あり方として否定された。だが、歴史を振り返れば、仏教や儒教、道教、陰陽道など別個の宗教伝統とみなされる信仰・思想が渾然一体となる場にこそ神信仰は成立した。本書はこの視点から新たな方向性を試みる。一章・神観念の歴史、二章・祭祀制度の変遷、三章・神と仏の関係史、四章・さまざまな神、五章・神道の古典と文学、六章・神の表象、七章・神の理解―神道思想の諸相、八章・神々の儀礼と芸能

近代日本における知識人と宗教
―姉崎正治の軌跡―

磯前順一・深澤英隆編　A五判四四〇頁／本体一二〇〇〇円

姉崎正治（一八七三―一九四九年）は「嘲風」の雅号でも知られる明治・大正期の文筆家であるが、同時に日本における宗教学のパイオニアとして知られる。彼の学問および思想活動の全体像を、未公開の貴重な資料にもとづき、詳細な年譜とともに再現する。一部―伝記、二分―研究論文、三部―年譜、四部―資料目録

●東京堂出版

特集 慰霊と追悼

一三世紀「蒙古襲来」と「蒙古の碑」
――日本の死生観における鎮魂と怨親平等をめぐって

テレングト・アイトル

1　はじめに

周知のように、一三世紀モンゴル帝国のフビライ・ハーンは、海上艦隊を派遣し、一二七四年（文永一一年）と一二八一年（弘安四年）二度にわたって日本に侵攻した。この文永・弘安両度の「蒙古襲来」とその歴史背景について、日本の学校教科書はもちろんのこと、それにまつわる物語、フィクション、マンガ[1]なども近年増え、とくに二〇〇一年、NHK大河ドラマ『北条時宗』が放映されてからは、だれにでも知られている歴史的な出来事になっている。歴史記憶のこの「再生」ブームにおいて、著書・メディアの大方は、どちらかというと主として弱い小さな国が、巨大な敵を目前にして、敢えて対抗し、自然（神）の守護のもとで打ち勝ったという運命の共同体を再確認するような、あるいは悲壮な英雄談に教訓を求めるようなことに関心を寄せている。しかし、その歴史の真の背景はどうであったかという虚実・真偽についてはほとんど問うことなく、歴然たる事実として受け止められてきたといえる。なかでも当時の日本とモンゴル側の戦死者の祭祀や墓標・墓地・塚・石碑などについてはまれにしか言及されず、各種のメディアで話題となった「蒙古襲来」の言説とは反比例して、逆に当初から現在まで祭られてきた犠牲者怨霊の追善の塔――「蒙古の碑」や「蒙古塚」、いわば日本史上初めて「国難」

をもたらしてきた外国の敵の怨霊を祭るという起源的な出来事などは、まるで忘却のかなたに置き去られたかのようである。

事実、この二回の戦争の起因・目的、戦争そのものと「戦後処理」などについては、未だにほとんど明らかにされていない。戦争とその背景全体は伝説・フィクションとして伝えられてきた部分が多い。幸いなことに、ごく最近になってからのことだが、モンゴル史・中国史・中央アジア史ひいてはヨーロッパ史まで通観できるような日本の歴史研究が進み、「蒙古襲来」もようやく解明できるようになりつつある。しかし、それでも二度の「蒙古襲来」という日本攻略に関わる時代、つまり一二六〇年代から一二九〇年代までの間、西アジアから中央アジア、中国から韓国などの政権を激変させたモンゴル帝国は、ユーラシア全体に広がる各国・各地域に対して、一体どのように互いにリンクさせ、連動させ、支配と通交をつなげていったか、あるいはフビライ・ハーンがどのようにそれを構想し、具体的に仕掛けていったか、それらについてはほとんど謎に近い。したがって、「蒙古襲来」それ自体と、戦争の犠牲者、あるいはその戦死者のための墓標・塚などの戦後の諸事情と関連の出来事もなお不明なことが多い。

本稿は、最近のユーラシア大陸歴史研究の視野に基づき、この二回の「蒙古襲来」にまつわるいくつかの出来事を踏まえ、日本におけるモンゴル側の戦死者の祭祀や墓標を取り上げ、とくに江戸時代に再発見され、近代になってから再祭祀され、今日までも祭り続けられている仙台の「蒙古の碑」について考察して、日本古来の信仰と死生観の歴史的意味と象徴的な意味を考えたい。

2　従来の「蒙古襲来」史観

ひるがえって「蒙古襲来」とその歴史的背景について、一般教科書[2]に沿ってみると、概ね次のように語られてきたといってよい。つまり、一三世紀初頭、北方の草原に突如としてモンゴル帝国が誕生した。その太祖チンギス・ハーン（一一六七～一二二七年）は、一二〇六年即位してから数々の大遠征をし、その野望が息子から孫の世代へと継承され、その軍事的拡張はユーラシア大陸の東西まで広がる。五代目のフビライ・ハーン（一二一五～九四年）は都を北京に移し、一二七一年に国号を「元」と称して、南は南宋を圧迫し、東は高麗をおさえて、ついに日本をも支配下に置こうと計画するにいたった。

一二六八年、第一回目のモンゴル使節の日本到着から、文永（一二七四）・弘安（一二八一）の役後まで、通交・警告・脅迫のための使節派遣は計八回にものぼったが、鎌倉幕府はそれを拒絶しつつ対抗してきた。フビライ・ハーンは使節派遣と同時に武力によって事を解決しようと、一二七四年、元兵と高麗兵合計三万（また二万五〇〇〇など様々の説有り）からなる軍を兵船九〇〇隻に分乗させ、朝鮮南端の合浦から出発させた。彼らは対馬に上陸し、壱岐をおそい、肥前の松浦郡をおかし、博多湾に侵入した。日本軍は元軍の集団戦法や火器による攻撃のため苦戦におちいったが、暴風雨が起こり、一夜にして元軍兵船二〇〇余隻がくつがえされ、残る船をまとめて合浦へ退却していった。これを第一回目の「蒙古襲来」、「文永の役」とよんでいる。

一回目の侵攻後、一二七五年フビライ・ハーンはさらに杜世忠らを使者として送った。北条時宗はこれらの使者を斬り捨て、博多湾の海岸一体の防衛体制を強化した。一方、一二七九年、フビライ・ハーンは南宋鎮圧に成功すると、杜世忠らの消息をきかないまま、またもや使者を送ったが、これも斬り捨てられる。フビライはここで初めて使者らが斬殺されたことを知り、再び日本遠征軍の派遣を決定した。東路軍と江南軍の二つに分け、東路軍は、元・高麗・江北の兵あわせて四万、江南軍は一〇万という。一二八一年五月、まず東路軍は対馬・壱岐を侵して博多湾に攻め込んだが、日本軍の奮戦により、肥前の鷹島へ退き、予定より遅れて出発した江南軍の到着を待った。六月末江南軍が到着すると、東路軍と合流し、七月末に集結し、太宰府を目ざして最後の総攻撃に移ろうとしたその夜半、再び襲った大暴風雨は、元軍の兵船四〇〇〇余隻の上に荒れ狂い、そのほとんどは玄海の藻くずとなり、残ったものはわずか二〇〇隻にすぎなかった。日本軍は暴風雨の衰えるのを待って鷹島を攻撃し、二〇〇〇余人を捕虜とした。元軍一四万のうち生きのび